

Title	都鄙のユートピア：都市主義と「反」都市主義
Sub Title	The various thought of city and country : the complex of urbanism and anti-urbanism
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.55 (2002.) ,p.5- 25
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000055-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

都鄙のユートピア

——都市主義と「反」都市主義——

The Various Thought of City and Country:

—The Complex of Urbanism and Anti-Urbanism—

藤 田 弘 夫*

Hiroo Fujita

While city is praised as a great human creation, it is also criticised as a sink of iniquity. From old times, life in city is thought to have deviated from the human nature and corrupted. In fact, city in both east and west have created the serious social diseases and invited the praises as well as the criticism for its harm. There is a similar thought everywhere in many different forms, that one should avoid the immoral city life and live the honourable poverty in country.

People in different times and places have different thoughts about the life in city. Even in a country, there are always the arguments for and against the city life. In the United States and the UK, the arguments against the city are apparent, while it is not very much so in France and other European countries. Rather, the city's strength is loudly praised in France. In China, there is also much discourse which praise city traditionally. In fact, the word "China" means "in the wall", that is "city people", and in China "city" means civilization, whereas "country" means savage. Even after the revolution, city in China stayed superior to country. In Japan, City, Miyako, has also been the place of admiration. The valuation of city and country is always a matter of degree and can vary with the conditions in a society.

第1章 都会と田舎

【生活のなかの都鄙の問答】

都市には人々を魅了するものがある。人は都市の偉大さを称える。人は都会にあこがれる一方で、田舎をばかする。田舎をばかにする言説にはことかかない。しかしその一方で、田舎の素晴らしさを称えらるとともに都市を嫌悪する言説も少なくない。

わたしたちはふだんの会話のなかで、よく「あの人は都会の人だ」とか、「あの人は田舎の人だ」といったいい方をする。都会の人だといういい方には、洗練されている、合理的だ、要領がいい、スマートだという積極的な評価がある。しかしその都会の人という表現は肯定的な意味ばかりではない。都会

* 慶應義塾大学文学部教授（都市社会学）

の人だといういいかたには、擦れている、人情に欠ける、といった否定的な意味でも使われている。では、逆に田舎の人にはどのように評価があるのだろうか。田舎の人だといういい方には、あか抜けしない、愚直だ、融通がきかないといった否定的な評価の反面、純粹だ、正直だ、といった肯定的な意味で使われる。都会の人間とか、田舎の人間といういい方は、どちらも善悪両方の意味で使われているのである。それをどちらの意味で使うかは、言葉が発せられたコンテキスト次第であろう。

都会がいいのか田舎がいいのかという比較はしばしばなされる。「都鄙問答」は日常的に行われている。新聞や雑誌などは、何年おきかに「どの町が住みやすいか」といった特集を行っている。その際、便利さ、物価の安さ、住宅の広さ、便利さ、静かさ、自然との触れ合いなどが、快適な都市生活の指標として、選ばれている。ところが、そこで選ばれる都市は決まって伝統的生活を保持している地方の都市である。急激に発展をしている都市が選ばれることはない。そこには都市的価値観に警鐘を鳴らそうとする記事のねらいもあるのだろう。小京都という呼称をもつ都市は日本の各地にある。また、テレビ番組でもさまざまな視点から、町の住みやすさについての番組が増えている。

都市のなかでも住宅を捜す時には、都鄙の選択が迫られる。わたしたちは便利な都心のマンションで暮らすか、それとも郊外の庭付きの一戸建てにするかを比較しながら考える。その際、大都市でも高級住宅地とされるところは、田園の快適さをもったところである。都市の便利さを強調する人でも喧騒や猥雑さのなかで生活したいと思っている人は、けっして多くはない。定年後は、田舎でゆっくり生活したいと語る人は多い。いくら都会が便利で刺激があるからといって、新宿の歌舞伎町のような繁華街に住みたいという人は多くはない。しかしだからといって、にぎわいの消えたシャッター商店街にはさびしさを感じるものである。

都市生活をする人で余裕のある人は田舎に別荘をもっている。さらに都会人は保養、リクレーションで田舎にでかけていく。また、余裕のある田舎の人間が都会にマンションの一室をもっていたりする。田舎の人も何かと、都会に出て来る。都会の人間や田舎の人間で、それぞれ田舎と都会に常宿をもっていることが少なくない。人間はつねにあらたな出会いをもとめている。人びとは観光客となって各地を旅している。それどころか、あらたな刺激をもとめて冒険や探検をする人も少なくない。

【都会の魅力と魔力】

都市は人間の活動の中心である。「神が田園をつくり、人間が都市を作った」といわれるように、都市は文明を象徴するものとなっている。都市はその出現以来あらゆるものを生み出してきた。都市は人類にはかりしれない貢献をしてきた。都市はあらゆる驚異を生み出してきた。人びとが文化をつくり出す場こそ、都市にはかならない。近代における都市の急激な成長は、富の飛躍的な増大をもたらしている。都市は資本主義の発展とともに、未曾有の繁栄を遂げるようになった。しかし都市の発展はつねに未知の深刻な問題を生み出してきた。都市の成長はさまざまな問題の拡大過程でもあった。

現在、都市は交通混雑、環境汚染、騒音、不良住宅などの物理的問題のみならず、犯罪、疫病、売春、貧困など社会問題の舞台となっている。また、都市では、さらに大麻、ヘロイン、マリファナ、コカインなどの非合法なものを含めて、薬物の使用者が広がっている。都市は拝金主義の跋扈する場である。こうしたことから、都市は墮落し退廃した文化が蔓延する場だと忌み嫌う人も多い。その一方で、ゲイやレズビアンをはじめマイノリティにとっては、人間解放の場ともなっている。

田舎には自然、静寂、平和、無垢、純朴といったイメージがある。これにたいして、都会には人工、

騒音、闘争、擦れている、策略といったイメージがある。これとは逆に、田舎は無知、偏狭、後進性といった観念と分かちがたく結びついている。これにたいして、都会には、知識、優柔不断、先進性といった観念がつきまわっている。都会は喧騒に満ちている。これにたいして、田舎は静寂に包まれている。田舎には自然があり、都会にはさまざまな人がいる。田舎の人は多くの人を求めて都会に行くし、都会の人も自然を求めて田舎に出かける。

人びとの都市生活にたいする思いは、「場所」により「時代」によりさまざまである。都市生活については、ひとつの国のなかでも、つねに賛否両論がある。アメリカやイギリスでは、どちらかというと都市に批判的な言説が目立っている。これにたいして、同じ西洋でも、フランスでは比較的そうした声は小さいようである。むしろフランスでは都市の力強さを称揚する声が大きい。また、中国では伝統的に都市を称賛する言説が強い。そもそも中国とは城壁の囲いの中、つまり都市人という意味である。中国の「華夷」思想の〈華〉は都市であり〈夷〉は地方である。都市の優位は革命後も継承された。都市と農村の「二元的戸籍制度」は都市へのあこがれをさらに高めたのである。

都市は人間の偉大な創造物として讃えられる一方で、しばしば悪徳の巣窟として非難的ともなってきた。都市の生活は人間の本来のあり方から逸脱し、墮落した場所だとする考え方が古くから生み出されてきた。都市は洋の東西を問わず、古くから深刻な社会病理を生み出していた。大都市の賛美とともに、その弊害を指摘する声もつねにある。都市の頹廢した生活を避け、清貧な「晴耕雨読」に理想の生活を求めようとする考え方は形こそ違え、どこにでもある。都市と農村の評価はつねに程度問題である。また、ひとつの社会でも条件次第で変わってくる。次に都市を、こうした観点から見てみよう。

第2章 都市主義と「反」都市主義の系譜

【古典古代の都市思想】

人びとは神の偉大さを称えるために神殿を建設した。人びとは神殿の威容を誇った。神殿は多くの人間と多種多様な情報や物資が集まる場所であった。都市は贅を尽くした生活を可能にしたのである。豊かな都市生活は人びとを魅了してきたのである (Mumford; 1961=1969: 97)。しかしその一方で、そうした生活が、人間本来の生活を逸脱したものだとする考え方も、古くからあった。『旧約聖書』においても、バビロンやソドムとゴモラなどの都市は、悪徳に染まった場所として描かれている。都市は雑踏や不潔にとどまらず、道徳的な頹廢から悪徳の栄える場所とされてきたのである。

古代ギリシア人は神殿を中心に多くの都市を建設し、活発に商業活動を展開した。都市は繁栄の陰で、さまざまな矛盾を抱えていた。こうしたなかで、プラトンやアリストテレスは理想の政治社会を追及した。彼らの説いた政治社会論は今でいう国家論でもあり都市論でもあった。プラトンは5040人の市民と奴隷、外国人からなる内陸部の自給自足の理想の都市を描いた。また、アリストテレスは『政治学』で、市民がお互いに知り合える程度の規模で、港を通じて外国とつながっている理想都市を描いている。市民は戦士階級と政務官の階級からなり、何よりも有徳でなければならない。それには市民は仕事をしないことが要求される。このため奴隷の存在が都市には不可欠なこととなっているのである。

古代世界を統一したのは、ローマである。各都市はローマの影響のもとに柱廊、競技場、神殿、広場、学校などを整備していった。知恵と徳による支配がもたらされた。首都のローマに広大な帝国の各地から富が集中する。ローマは繁栄をむさぼり、市民は美食を追及した。人びとはパンとサーカスなどの見世物を楽しんだ。

とくにローマの宮廷はすさまじい奢侈と浪費を行った。かれらは胃の限界を越えて美食を追求するために「吐き棄」まで用意して宴席に臨んだ。かれらは食べるために吐き、吐くために食べる生活にあげくれたのである。都市文化の爛熟のなかで、やがてローマは繁栄よりも墮落が目立つようになってきた。

あらゆる価値の上に富が君臨し、貧乏が物笑いの種とさえなった。富の前には不正も問題とされなかった。欲望がこれほど大きく懷を開いたことがあったのだろうか、バクチが人びとのところをここまで捕らえたことがあったのだろうか、悪徳がこんなに栄えた時があったのだろうか、と問われた。性の解放は性道德の退廃をもたらした。人びとの集まる公衆浴場は快楽、娼婦、催淫の舞台となっていた。墮胎や流産は日常的なことであった。都市は密集にとまなう混乱と墮落した文化の中心であった。

ローマの都市の混乱と喧騒はすさまじいものとなっていた。セネカ (L. A. Seneca) は街路での雑踏がひきおこす騒音で、多くの人が不眠症になっているという。狭く曲がりくねった通りに轟く荷車の騒音や羊の群れのうめき声は苦痛この上ないものである。このため上流社会のなかには、都市の喧騒と頹廢を避け、田園に別荘 (villa) を構え、田舎で生活する者が増えるようになってきた。こうした人びとが、次第に増えていったローマが帝国を支える税源を都市に依存するようになるとともに、市民はますます流失していった。帝国には、都市の「農村化」が進行していった。ローマの都市は内側から崩壊していったのである。

【中国における都市思想】

中国とは國の中を意味する。中国において、都市は國家そのものである。大都市の建設が君子のわざとして『詩經』や『孟子』に描かれている。都市は王の儀礼的施設として建設された。中国の都市は王や王朝への賛美として登場する。都市は漢語では「城市」と書き表される。つまり城と市である。都市は君子のいる城ともうひとつ「市場」という性格をもっていた。都市は市場のあるところだった。戦国時代に齊の首都であった臨淄の繁栄は民衆の音楽や見世物の風景として語られている。

中国の首都の理想像が『周礼』に書かれている。都市は城壁で囲んだ方形の中央に王宮を置き、道路を東西南北に直交させるものである。しかしこれまで発見されているどの都市も、周礼の記述を厳密に守ったものはない。だが、方形の城壁の中央に王宮を南面させ、そこから南の城門にまで大路を引く計画の基本は中国の各都市のみならず、中央アジアや北アジアにまで取り入れられていった。さらにこの基本形態は朝鮮、日本、ベトナムにまで広がっていった。

中国の都市はまず帝国の行政機関の所在地であった。都市は皇帝の居住地である首都から府城、州城、県城と配列されていた。政治の中心である都市は政争の場でもあった。政争に破れた人たちは失意のうちに地方に追いやられた。かれらは田園で都への思いを募らせていた。

宋代になると、いちじるしく商業が発展する。都市は商工業の中心として繁栄するようになる。16世紀以降、社会の商業化が一層進む。孟元老の『東京夢華録』は活気に満ちた首都開封の繁栄を描いている。開封にはおびただしい数の劇場がさまざまな出し物を競い、燈火が灯された豪壮な酒樓が延々と立ち並び、毎夜の宴会は深夜にまでおよんだ。都市は統治の拠点とともに、商工業の中心となる。都市は高貴さと豊かさの場であった。しかし都市は同時に欲望と墮落の場であり陰謀がめぐらされる場であった。

中国においても都会の煩わしさを避け、静かな田舎での生活こそが理想の生活だとする考え方が古くからあった。田園で清談する「竹林の七賢人」に代表される田園生活への憧れがあった。人びとは現実

の生活のなかで失われた「桃源郷」に思いを寄せたのである。また、いつの時代にも姿を変え、自然のなかでの隠遁生活に人間本来の姿があるとの考え方があった。

【イスラム社会における都市思想】

古代世界の没落後、華やかな都市文化を咲かせたのが、イスラム世界である。イスラム教は発祥の地が西アジアの乾燥地帯であるために、遊牧民の宗教というイメージがつよい。砂漠の民の偽善と無信仰が聖典『コーラン』に描かれている。遊牧民は頑固に神を受け入れようとしなければかりか、神の掟の理解も遅い。イスラム世界はムハンマド（マホメット）が商人だったこともあり、徹底的に都市の宗教である。かれは遊牧民の価値観との激しい闘争のなかからイスラムの宗教体系を築いたのである。

イスラム世界において都市は文化の中心であるばかりか、砂漠のなかに浮かび上がる樹木の繁るオアシスの場である。豊かな生活がバグダッド、バスラ、カイロ、アレキサンドリアなどの都市で営まれていた。都市には豪華な宮殿、庭園、公衆浴場、街路、市場（スーク）が建設された。豊かな生活が『千夜一夜物語』に描かれている。山海珍味の豪華な食事が用意された宴会では、ウードの調べにのって踊る美しい女性やチェスを楽しんだのである。

これにたいして、都市の城壁の外は妖怪変化が住み荒野の広がる場所として描かれている。遊牧民は旅人にとって、いつ夜盗になるかもしれない危険な存在なのである。都市が〈文明の場〉であるのにたいして、砂漠は〈迷信〉と〈不道德〉の場所に貶められている。

しかしそのイスラム世界にも、都市を墮落の場とする思想家がいた。そのひとりが、イスラム最大の歴史哲学者といわれるイブン・ハルドゥーン (Ibn Khaldūn) である。彼は都市に文化の頹廃を見ていた。かれは都市について次のように主張する。都会の人は一般にさまざまな快楽に耽り、奢侈や現世における栄達や欲望の追求に身を委ねがちである。このためかれらの心は悪に染まってしまい、善の道からはずれてしまっている。田舎や砂漠の人は都会の人と同じように現世のことに関心をもっているといっても、生活必需品に関してであって、奢侈とか快楽の対象となるものについてではない。田舎や砂漠の人の行動を規制する習慣は、その生活同様に単純であって、かれらの犯す過ちも都会の人の過ちと較べると微々たるものでしかない。

田舎や砂漠の人は自然状態に近く、都会の人と違い、罪深くて醜い行為を繰り返すうちに芽生える悪徳に、その心が染まっていない。田舎や砂漠の人は容易に罪を論し、善行に導くことができる。都会の生活は文化の頂点であると同時に、墮落への出発点である。かれは都市生活が悪の最後の段階であり、善からもっとも遠い場所となっていると主張する (Ibn Khaldūn; 1377=1983: 240)。イブン・ハルドゥーンは都市文明の発展が必然的に墮落を内包しており、滅亡の出発点となっているという。かれの独創的な歴史哲学や社会理論はイスラム世界において特異なものである (Baali; 1988)。それは都市を墮落の場と見る独特の都市論に遺憾なく発揮されている。

イスラム世界においてはイブン・ハルドゥーンのような例外はあるにせよ、都市は緑とオアシスに象徴される「文明の場所」であった。とりわけその傾向は、イスラム教が古くから広がった西アジアや北アフリカの乾燥地域において強くもっている。

【西欧における都市思想】

西欧では古代ローマの没落後、都市は長い衰退期を経て復活する。北ヨーロッパなどでもロンドンや

パリなどの都市が勃興してきた。都市には富が集まっていた。一部の人びとの贅沢は秩序を脅かすものとなっていた。このため 13 世紀以来、ヨーロッパの各都市で「奢侈禁止令」が出された。都市は陰謀や策略の舞台となっていった。西欧の社会には矛盾がみなぎるようになっていった。

トマス・モア (Thomas More) は『ユートピア』を著し、理想の社会を模索した。イギリスでは羊毛の生産の高まりから、地主が農地を羊の放牧地として分割して閉い込んだ。その結果、貧民は農地から追い出されていった。イギリスでは「羊が人間を食べる」といわれる事態を生み出した。モアは貧乏と苦難の負担が私有財産制度のもとで、大多数の人間に避けられない負担となるというのである。モアはユートピアを当時の社会の矛盾を裏返しにしたような理想国として描いている。

パリはフランスの中心として、時の経過とともに着実に発展していった。パリの名声はヨーロッパ中に轟いていた。パリの豊かさは人びとを魅了してきた。とはいえ、パリを礼賛する人ばかりではなかった。ルソー (Jean-Jacques Rousseau) はパリを厳しく論難する。ルソーはパリを大きく美しい都市として思い描いていた。ところが、ルソーがパリに来て最初に見たものは、汚い悪臭漂う狭い通り、黒ずんだ醜い家々、不潔と貧困、乞食、荷馬車引きとボロをまとった女、煎じ薬や古帽子を呼び売りする女などだった。彼はそのときの印象があまりにも強かったので、その後どんな壮麗な建築物を見ても最初の印象を拭えなかったといっている (Rousseau; 1962=1977: 178)。

しかし J. ルソーがパリでの生活を通じて、何よりも嫌ったのはそこでの「人間関係」のあり方だった。かれは大会において、人が本来の姿とは別のものになるという。人びとは社会によって、本来の自分とは異なる存在を与えられるという。このことはとくに女性に強く表れる。パリの女性は、他人の視線を気にかけている。したがって、パリの女性を見ようにも、目に写るものは実は流行の亡霊に過ぎないのである (Rousseau; 1962=1982: 314)。

ルソーはパリに住むことに、嫌悪感を抱き続けていた。パリはルソーにとって、喧騒と泥の町であり、女性が名誉を信ぜず、男性が徳を信じない町と写っていた。やがてかれは愛と幸福と無垢をもとめてパリを去ることになる。ルソーはこのためできるだけパリから離れたところに行こうとする (Rousseau; 1962=1987: 156)。王室もパリから離れたベルサイユにあって、パリの動向を注視していた。

パリはその後も一段と膨張を続けた。パリには不穏な空気が充満していた。メルシェ (L. Mercier) は『タブロー・ド・パリ』で、大革命前夜のパリの不自然さを描いている。彼は大都市においては欲望が大きく膨らんでいき贅沢が不可欠になるという。人が本来もっている欲望はおとなしいものである。しかし大都市では欲望を膨張させるさまざまな刺激がある。世間が欲望を吹き込むのである。したがって、人口の多い都市では美德が欠如し腐敗が蔓延する。パリにおいては多くの情念が集中し、内部でぶつかりあっている。しかしともかく大きな犯罪もなく、うわべの平穏さがあるだけでもありがたいと思うべきであると述べている (Mercier; 1782=1989: 22-23)。このメルシェの指摘の 7 年後、大革命の幕が切って落とされパリは長い混乱の時代に突入するのである。

【日本における都市思想】

日本の大規模な都市は中国の影響を受けながら建設された。藤原京は最初の中国風の都城として造営された。その後さらに大規模な平城京が建設された。平城京は大仏の造営など律令国家の拠点として繁栄の極をきわめるのである。平城京の殷賑は「あおによし 奈良の都は 咲く華の 匂うがごとく 今さかりなり」(小野老)と歌にも詠まれた。平城京の華やかな生活は素朴で力強いあづま歌の描く世界と

対照的である。人びとは華やかな平城京での生活にあこがれた。人びとは殿上人となることを夢見た。

平城京に続いて平安京が建設された。平安京の貴族生活は栄華をきわめた。人びとは都の生活を享受する。都を去った人は、帰還の日を待ち望んだ。『伊勢物語』の一節には、あずま路の果てに生まれた女性の都への強いあこがれが描かれている。菅原道真の怨霊は大宰府を足場に京都の政界を糾弾するものではなく、ただひたすら都での復権を求めての恨みでしかなかった(塚本; 1991: 108)。武家である平氏も都の華やかな生活に溺れた。木曾の田舎から攻め上った木曾義仲の兵隊の粗暴な振る舞いに都人は顔をしかめる。將軍源実朝は鎌倉の地にあって、都にあこがれ続けた。

足利尊氏は京の都に幕府を開いた。室町におかれた幕府の建物「花の御所」とよばれた。京を舞台に作り出されたさまざまな文化は室町文化とよばれている。室町の文化は華やかさを追求する一方で、田舎風の「わび」「さび」の概念を強調するのである。しかしそれはあくまで田舎風のものであって、田舎のものではなかった。京風の文化は全国に広がっていった。朝倉氏は一乗谷を大内氏は山口を京風に建設する。戦国の世に各地で覇を争った大名は競って京に上り、京から天下に号令をかけようとした。

徳川家康はあづまの地である江戸に幕府を開いた。江戸は各大名の江戸在住を義務づけた参勤交代制度とともに急激に拡大する。江戸は幕府の所在地として、世界有数の大都市へと成長することになる。これにともなって、江戸は質実剛健の武家の町から次第に都風の洗練された町へと変化していった。とくに綱吉は君主の徳によって人民野卑をあらためるという理念のもと京都の文物を積極的に取り入れた。諸大名も江戸での暮らしを楽しみはじめた。江戸は大名にとっても家臣にとっても「花のお江戸」として魅力ある土地になっていた。諸大名は江戸の生活を享受し、お国帰りを嫌うものまで出てくるありさまだった。

各大名は国の城下町に、江戸にならった物資の集積所や歓楽の場をつくった。城下町のにぎわいは人びとの消費意欲を刺激した。人びとは交際を楽しみ遊びごころを満たした。そうした城下町を周囲の農民も誇りとするようになっていった⁽¹⁾。

江戸は膨張にともなって、さまざまな弊害を生み出していた。都市生活は何よりも消費の拡大をもたらしていた。儒者として幕府に登用された荻生徂徠は当時の風潮について、「世情の人、高下貴賤にかぎらず、人びとの身持ち、家の暮らし、覚えず驕りになり、今はまたその奢り世の風俗となりて、世界の常となる故、これを止むべきようなし」(荻生; 1987: 135)と警鐘を鳴らす。都市生活にともなう消費の増大は武士層の経済的な困窮をもたらしたばかりでなく、貴賤尊卑のそれぞれがもつべき「礼」をあやふやなものとしてしまった。かれはこうした観点から、武士の農村への還流による都市の縮小が幕府の安定にとって、不可欠だと主張したのである。地方でも江戸の影響で田舎の素朴さが失われ、日常の消費の高まるなかで労働を嫌う気風が生まれていた。

莫大な消費がなされる江戸では、何とか生きていけた。江戸には各地から人が集まり「江戸は諸国の掃き溜め」といわれるようになった。とかく過剰人口は騒擾を生み出しやすかった。このため繰り返し「人返令」が出された。また、松平定信をはじめ贅沢を戒める「奢侈禁止令(俟約令)」も断続的にだされた。幕府や各大名は18世紀後半から19世紀に、農民の説諭という形で、村々に都会の風潮にならうことを強く戒める法を打ち出すようになった(塚本; 1991: 126)。

日本において都市は〈ミヤコ〉として、みやびやかな生活が営まれる憧れの場所であった。ミヤコの生活は昔話の最後がしばしば「みやこに上って幸せに暮らしました」という一節で結ばれるように、垂涎的であった。町で富豪といわれる旧家も、祖先をたどると必ずどこかの田舎の出身となっている。

また今は田舎にいる人も、もとはミヤコにいた人がさまざまな事情で、田舎にきたとことになっている(柳田; 1969: 243-244)。田舎の系図の多くが「貴種流離譚」のかたちを踏襲している。日本では都市と農村とは一体のものとなっていたのである。

第3章 近代化と反都市思想

【資本主義の発展と都市】

都市の繁栄は人と物資を都市にもたらす。イギリスの都市は資本主義の発展により、急激な拡大を見せるようになる。人も物も都市に向かった。産業革命は人類に大きな可能性をもたらした。都市は豊かになるとともに未曾有の繁栄を遂げるようになった。人びとは豊かな生活を享受した。しかし都市はまた病理をもたらししていた。都市は人びとにさまざまな魅力と同時に、多くの陥穿をもたらししていた。食糧をはじめ生活資料の生産から遠ざかった都市での失業は、ただちに生存が脅かされることを意味した。経済の「自由」は伝統的な〈生活保障〉からの自由をも意味したのである。

産業革命は、都市の規模を一気に拡大させる。資本主義は富をもたらす新しい宗教のようなものであった。都市は未曾有の繁栄を謳歌する。都市には壮麗な建造物が次々と出現する一方で、貧民街が拡大していった。資本主義的企業は急激な盛衰を繰り返した。瞬時に莫大な富を獲得する者が出るかと思えば、わずかな富すら失う者が続出していた。

資本主義の発展は都市への食糧供給を安定的なものとする事となった。資本主義はどこからでも食糧を運んできたのである。都市は飽食に満たされた。しかし貧しき人のもとには食糧はなかった。都市は富と繁栄に預かれない多数の貧困層を底辺に蓄積させていたのである。都市の繁栄の陰で失業が日常化し貧困と飢餓の場となっていた。それどころか、都市の密集した生活はコレラや結核などの疫病を蔓延させることとなった。貧しき人々は生存まで脅かされていた。都市問題の深刻さは誰の目にも明らかとなっていた。急激な都市の膨張は、未曾有の病理を生み出していたのである。

こうしたなかで、さまざまな社会主義思想が芽生え、都市のなかで育っていった。フランスにおいてもサン・シモン (Saint-Simon) やフーリエ (F-M-C Fourier) などは、発展する経済と政治秩序の混乱のなかで社会の新しい組織のあり方を模索する。ロバート・オーエン (Robert Owen) は労働者の健康をまもるために、工場を田舎に移す有名な実験をおこなった。かれはスコットランドのニュー・ラナークで実験を行った後、アメリカにわたりインディアナ州にニュー・ハーモニー村を建設する。

都市には壮麗な建造物が次々と出現する一方で、無数の貧民街が形成されていった。劣悪な都市環境は都市民の寿命を縮めていた。イギリスの都市の乳児死亡率は1820年以降急に上昇する。しかしその間も、都市人口は急増していたのである。農村は都市に移住者を送り続けたのである。工業都市では貧民たちが示威運動をし、乞食たちは街中で物欲しそうに手を出していた。どんな方向にも5分間歩けば、貧民街が少なくとも貧民窟の子供たちに会うありさまだった (Mumford; 1938=1974: 220)。

F・エンゲルスは『イギリスにおける労働者階級の状態』や『住宅問題』を著わし、都市生活の悲惨さを説いていった。そこは「人間性の最低のレベル」が見られる場となっていた。K. マルクスは資本主義の本質的矛盾を解き明かそうとしていた。都市の悲惨さはかれらにとって、邪悪で貪欲な資本主義に必然的に付随するものと考えられていたのである (Harvey; 1973=1976: 174)。社会主義思想は急激な都市の膨張が生み出す無秩序と混乱のなかで、生み出され彫琢されていったのである。社会主義運動は、次第に大きな力を得ていった。

【都市生活のイギリス型とフランス型】

イギリスで都市生活のあり方に影響を与えたのが、福音主義 (Evangelism) 運動である。英国国教会内から興った福音主義運動は、何よりも家族の役割を重んじた。かれらには都市が汚くて混雑した不健康な場所であるばかりでなく、退廃と不道德の場所と写っていたのである。都市は家族の敵にチャンスを提供する場なのである。都市は神の律法に背いている。福音主義者は都市の舞踏会、遊園地、居酒屋、娼婦など娯楽を非難していったのである。福音主義は都市の墮落した文化から家族を守る必要があった。それには、仕事の間から家族を遠ざけなければならない。このため墮落した都会を完全に離れ、田園地帯に自然の生活を求めたのである。

1840年代はじめマンチェスターでは、ブルジョワジーが生活環境の悪化した労働者の住む市街地を離れサバービアへと移動していった。資本主義の発展にともなう階級分離は職住分離をもたらしていった。アメリカのブルジョワジーも都市を移民とマシーン政治、道德的退廃に満ちた場所と見るようになっていた。都心は危険な場所となっていた。アメリカのブルジョワジーも安全で健全な生活を求めてサバービアに移動していった。この動きが、イギリスやアメリカの都市の物理的な形態を変えていった。

ヴィクトリア時代は、性と年齢による分離が進行していった。ブルジョワジーたちは貴族が都会で繰り広げる舞踏会、コンサート、カード遊びなどを危険で放縦だと拒絶した。それらが許されるのは、娯楽としてではなく、試練としてだけである。福音主義運動の家族の防衛意識は強烈な「反都市主義」へと駆り立てた。都市での仕事と福音主義家庭の理想と矛盾がサバービアの理念を生み出したのである (Fishman; 1987=1990: 41)。環境の悪化した都市の中心部を離れて、サバービアで生活することこそ、聖書にかなったものであった。

こうしたイギリスの動きと対照的だったのが、フランスである。フランスには福音主義運動のようなピューリタンの伝統はなかった。したがって、ブルジョワジーはパリの上流階級が享受してきた劇場、舞踏会、カフェ、レストランに加わっていった。

ブルジョワジーたちは1850年代から1860年代のパリの急激な成長のさなか、サバーブに移動するのではなく、豪華な都心のアパートで暮らすことを選択するようになる。パリの都心はブルジョワジーたちの豪華なアパートの建ち並ぶ場所となっていた。フランスではイギリスと異なりサバーブは従来どおり否定的ニュアンスをもち続けることとなった。フランスでは、サバーバニゼーションが労働者階級かせいぜい中産階級の周辺部への移動を意味するに過ぎなかった。この過程は、ドイツやイタリアなど他のヨーロッパ諸国やラテン・アメリカでも時期と程度の差はあるにせよ同様の形態をもっていた。

この動きはパリを帝国の首都として改造しようとしたナポレオン III 世とジョルジュ・オースマン (George Haussmann) による「パリ大改造計画」によってさらに決定的となる。パリの中心部で豪華なアパートの建設が大規模になされるのである。ブルジョワジーは都心のぜいたくなアパートに住み劇場、舞踏会、カフェ、レストランに通う華やかな生活を楽しもうとしたのである。

【帝国主義と植民地の都市形成】

スペインとポルトガルが世界の各地に進出して行って以来、西ヨーロッパは植民地や東方貿易で潤い始める。香料、砂糖、茶、コーヒー、タバコ、金、銀などの貿易は莫大な利益をもたらした。外国との貿易がヨーロッパ諸国の国内経済にがっしりと組み込まれるようになった。イギリスはオランダに次いで外国貿易の覇権を握るようになる。16-18世紀にイギリスの農村部に建設された壮大華麗なカント

リー・ハウスは、こうした貿易の利益の上に築かれたのである。都市は外国との貿易で地位を高め国内の農村はいうにおよばず、外国にも大きな影響をあたえることとなる⁽²⁾。

資本主義の発展はヨーロッパ諸国を、帝国主義へと駆り立てていった。帝国主義は世界を植民地化させていった。欧米における資本主義の発展は、アジアやアフリカの都市の発展をうながしたのである。こうしたなかで、小集落かせいぜい小都市でしかなかったようなカルカッタ、ボンベイ、マドラス、シンガポール、バタビア、サイゴン、香港、上海などの都市が大都市へと発展していくのである。ヨーロッパ諸国の拠点として建設された都市はやがて、以前からあった伝統的な中心都市の人口規模を凌駕するようになる。

これらの都市は欧米の文化の「入口」であり、欧米への物資の「出口」となった。莫大な富がこれらの都市を通過して、ヨーロッパに流出していった。植民地は本国との関係が密接になるにつれ、疲弊していった。植民地は本国の原料供給地や市場としての性格を強めていった。多くの人びとに過酷な負担がなされるとともに、旧来の社会秩序は急速に解体する。植民地では原料や食糧を本国に運ぶために、鉄道が積極的に建設される。インドで生産された原料や食糧は鉄道で沿岸部に運ばれ、そこから蒸気船でイギリスへと運ばれたのである。飢餓と貧困に打ちひしがれた農村を尻目に、物資を満載した貨物列車が沿岸部の都市に向かった。

インド独立の父となったマハトマ・ガンジーはインドにおける都市の果たしている役割をきびしく論難する。M. ガンジーは、都市の成長を悪とみなす。それは人類と世界にとって不幸であり、イギリスにとっても、インドにとってはなおさらのこと不幸である。イギリスは都市を通して、インドを搾取している。インドの都市はまたインドの農村を搾取している。村落の血液は都市に建設される堂々たる建造物のセメントになっている。かれは時とともにますます太くなっていく都市の動脈に流れる血液をもう一度村落の血管にもどしたいとのべた (Gandhi; 1957: 182)。植民地と宗主国との関係は、どこでも程度の差はあれ似たようなものとなっていた。

【社会主義の発展と都市の改良】

都市の急激な発展にともなう社会の混乱は、大きな課題であった。イギリスにはじまったさまざまな都市問題は、フランス、ドイツなどでも程度の差はあれ、同じように起こっていた。資本主義の発展にともなう都市の急激な膨張はどこでも、深刻な問題を引き起こしていたのである。こうしたなかで、P. J. プルードン、M. A. バクーニン、P. A. クロボトキンなどによって、アナーキズムやサンジカリズムなど多様な社会思想が発展を遂げていった。産業化の進展による社会の変化は新しい思想を必要としていた。ジョン・ラスキン (John Ruskin) は美術批評から政治や経済の研究に進み人間の精神の改造による社会改良を説き、社会改良事業にも協力した。またウィリアム・モリス (William Morris) は中世的な調和をもった資本主義と機械から解放された社会主義社会の実現を夢見た。そして芸術を俗悪な商業主義と工場主義から解放し、働く者が真の喜びを表現するものに高めようとする。

都市での多くの生活困窮者の存在は、人びとの注目を集めていた。ヘンリー・メヒュー (Henry Mayhew) は 1850 年代にロンドンで貧者のインタビューを行い、それを次々と新聞に発表していった。メヒューの調査はブース (Charles Booth) やロウントリー (Seebohm Rowntree) の社会調査の前身となった。社会調査はヴィクトリア時代に根づいていった (Savage & Warde; 1993: 18)。貧困をはじめとする 19 世紀の都市問題は、社会科学の原点のひとつとなった。

教会も都市の貧民に無関心ではなかった。宗教者は福音をさずけるために遠隔地への布教により貧民街に関心をもつようになった。1880年代には、キャノン・バーネットやジェーン・アダムスのような若い牧師や若い熱心な婦人が貧民街に定着していった。セトルメント・ハウスは棄てられ荒廃した地区に社会活動や教育活動の核を樹立しようとするものであった。(Mumford; 1938=1974: 304)

都市の悪化した環境を解決することは、大きな課題となっていた。クロボトキン『農場・工場・作業場』のなかで、工業を農村で展開する可能性を探った。イギリスの社会主義思想に大きな影響を与えたのが、フェビアン協会 (Fabian Society) である。それはガスと水道の社会主義といわれるように、すぐれて「都市の社会主義」であった。エベネサー・ハワード (Ebenezer Howard) は 1898 年に、クロボトキンやバッキンガムなどのユートピア作家の影響を受け都会の便利さと田舎の自然を合わせもつ「田園都市 (Garden City)」構想を発表する (Howard; 1965=1968)。かれは田園都市の実現に向けて、活動をはじめることとなる (西山; 2002)。

都市は資本主義の発展で、大量の物資が安定して流入するようになった。さらに都市の衛生状態は上下水道の整備などで次第に改善されていった。とくに 19 世紀末には、顕微鏡の発明により伝染病を引き起こす「細菌」が次々と発見され、その対策が講じられるようになった。20 世紀になると、近代医学は都市を、かつてない安全な場所に変えていった。都市の衛生面での改善は食糧の安定供給とあいまって、都市のさらなる拡大を可能にした。都市は産業化の進展でますます膨張を遂げるのである。

ハワードの提唱した田園都市の建設運動は、どこでも歓呼をもって迎えられた。田園都市は姿かたちを変え、世界中に広がっていったのである。その背景には、産業化の進行とともに急激に変化する生活様式と悪化する生活環境があった。田園都市の構想は発表後 10 年を経ずして、極東の日本にまで及んだのである (内務省; 1970)。人びとは産業化の進展のなかで、新しい都市の思想を必要としていたのである。

【共産主義の建設と都市の位置づけ】

ロシアでのボリシェビキ革命の成功は、都市に新しい時代がやってくることを意味した。共産主義政権下においては、党と政府が都市的定住を惹起するような機関を完全に監督下に置いた。都市の活動が完全に政治権力の統制下に置かれることとなったのである。革命と干渉戦争にともなう混乱が終り、社会主義の建設が本格化するようになった 1930 年代になると、ソヴィエトの内部で、社会主義における都市の位置づけをめぐる、活発な議論が起こった。ソヴィエトは新たな都市の建設に向かった⁽³⁾。

ソヴィエトは大都市の無秩序や混乱、そこから生み出される文化を頹廢的だとして嫌悪し資本主義的な病理として、その除去につとめた。だが、共産主義の建設も産業化の拠点となる都市を必要としたのである。共産主義社会の実現にも産業化は不可欠だった。このため既存の大都市が追認されたばかりでなく、産業化の拠点となる都市がマガダンをはじめシベリアの奥地にまで続々と建設されていった。モスクワ、レニングラード、キエフなど既存の大都市も無秩序な膨張こそ抑えられたけれども、共産主義の拠点として着実に拡大していった。

ところで、中国共産党はソヴィエトが首都のペトログラードを舞台として革命を達成したのとは異なり、「農村が都市を包囲する」という形で革命を達成した。中国共産党はその誕生こそ上海のフランス租界だったけれども、驚くほどの長征の末に陝西省の延安に拠点を構えるのである。かれらは延安を拠点に革命を指導したのである。人民解放軍の活動の舞台はもっぱら農村であった。しかし毛沢東は全国の

解放がほぼ決定的となった段階で、これからは党の拠点を農村から都市へ移すと宣言するのである⁽⁴⁾。ソヴィエト共産党に次いで中国共産党もまた、大都市に拠点を設けるようになったのである。

社会主義は資本主義が発展していくなかで、その矛盾の克服を課題として生み出された。したがって、社会主義思想の根底には、反都市主義的色彩が貫かれている。とくに共産主義では都市と農村との〈不均等発展〉の解消が大きな課題となっていた。しかし共産主義政権下でも、都市を解体することなど思いも寄らなかった。都市の病理を除去するために、せいぜい都市の無秩序な膨張を止めたにとどまった。むしろ都市は共産主義建設の拠点として着実に拡大していったのである。政府は都市民には生活に必要な食糧、住居、衣服、燃料などを供与した。とくに食糧配給制が導入されると国内通行証が必要となった。農民は許可なく都市にはいれなくなったのである (Becker; 1996: 307)。

都市は共産主義の「不均等発展の克服」という基本命題にもかかわらず、資本主義国の都市にも増して、農村より高い生活水準が保証される特権的な生活の場となっていった。農民は何かと理由をつけて生活水準の高い都市に流入していった。このため農民の都市流入を阻止するために、都市と農村の間の流動を禁止した。こうしたなかで、都市と農村との「二元的戸籍制度」が確立されるとともに、都市民の特権的地位が認められるようになった。社会主義者も都市生活を享受した。キューバのカストロも革命を成功させるために作戦上山中に逃げ込んだ。しかし革命後は大都市ハバナに拠点をすえるにいたるのである。都市と農村の格差の問題は共産主義国にも課題を残し続けた。このことは、中国の文化大革命においても、大きな問題となった。文化大革命は都市の若者を農民に学ばせるために農村への〈大下放〉を行った。

ところで、都市と農村の問題を一気に解決しようとしたのが、1975年に解放戦争に勝利したカンボジアのポル・ポト政権である。ポル・ポト政権は多くの共産主義国家においても、都市を完全に根絶させた点で、ほとんど唯一の例となっている。ここでは、歴史上空前の壮大な実験が試みられたのである。では、どのような過程を経て、都市を根こそぎ解体した社会が出現するにいたったのかを辿ってみよう。

第4章 偉大な実験

【カンボジア内戦とプノンペンの陥落】

カンボジアは第二次大戦後の1949年にフランスから王国として独立する。独立後、1960年代後半までシアヌーク (Norodom Shianouk) は国王として、また王族の一員として政権を担う。かれは隣国でのベトナム戦争に巻き込まれることを避けながら、「王国社会主義」とか「仏教社会主義」などと呼ぶ独特の国造りを進めていた。カンボジアは「平和のオアシス」「おとぎの王国」でもあった。首都のプノンペンには中国系やベトナム系の住民も多く、東南アジアでもっとも魅力のある町のひとつといわれていた。プノンペンの人口は、独立時の10万人から50万人程度に達するようになっていた (Osborn; 1994=1996: 2)。アメリカはベトナムでの解放戦争が拡大するにつれ、カンボジアの領土が北ベトナム軍や南部の共産ゲリラの基地となっていることを非難した。アメリカ軍はしばしばカンボジア領内に越境しシアヌーク政権と鋭く対立した。しかしその一方でシアヌークは、プノンペンを脱出し農村で活動していたポル・ポト (サロト・サル) らが率いる共産主義勢力のクメール・ルージュには、きびしい弾圧を加えていた。

ところが、1970年アメリカの支援を受けたロン・ノルはクーデターを断行し、シアヌークを追放してしまったのである。この事件によってカンボジアの政治情勢は一変した。シアヌークは民族統一のも

と追放されるまで弾圧していたクメール・ルージュとまで連合し、ロン・ノル政権への戦いを開始した。クメール・ルージュもかつての国王シアヌークと結びつくことで、篤い信仰心をもつ仏教徒の間に広範な支持を獲得しようとした。

ロン・ノル政権は米軍との協力でクーデターの当初は有利に戦いを進めた。しかし時とともに不利な戦いを繰り返した。都市の人口は内戦が激しさを加えるにつれ、避難民で溢れかえっていった。とくに首都のプノンペンには200万人以上もの人口を抱える大都会に膨れ上がった。プノンペン周辺の人口はクメール・ルージュの包囲のもとカンボジアの全人口の3分の1とも4分の1ともいわれるまでになっていた。こうしたなかで1975年4月17日にプノンペンはついに陥落する。

【大下放と都市の放棄】

波尔・ポト軍はプノンペンに凱旋するとともに、即刻すべての市民に首都を離れ田舎に行くよう命令した。その間、わずか一時間の猶予しか与えられなかった。旧政権を支援した米軍の報復爆撃が迫っているという。かれらは市民にきびしい態度で強制退去を命じた。凱旋軍は武器を片手に市民を農村へと追い立てた。ともかく市民は首都を離れていった。

突然、史上空前の大下放がはじまったのである。プノンペンから農村へと通じる道路は身の回りの家財道具をもった人たちが殺到し、前進するのも困難なありさまだった。大混乱のなかおびただしい犠牲を出しながら大下放が行われた。プノンペンはわずか数日でゴースタウンと化した。200万人とも300万人ともいわれたプノンペンの人口は数日で10万人以下にまで激減したといわれる。プノンペン以外の都市でも農村への下放が行われていた。大下放の犠牲者の数はプノンペンだけでも20万人を数えるという。

ところが、米軍による爆撃の危険がなくなっても、市民は都市に帰ることを許されなかった。波尔・ポト政権は都市住民の農村への下放は、都市民が身につけている西洋の墮落した文化を破棄するために必要なことだと主張した。サハコーと名づけられた自給自足的村落での生活は西洋の汚染された知識を身につけた都市民を教育するために不可欠なことだと主張した。波尔・ポト政権の行政組織であるオンカーは国民をコメ作りやかんがい施設の建設に動員した。人間は再教育することができる。しかし都市を再教育することなどできない。したがって、都市は破壊するしかないというのである⁽⁵⁾。

都市は諸悪の根源たる資本主義の牙城だった。資本主義を象徴する国立銀行は爆破された。都市に住んでいる者は誰でも資本主義者、帝国主義者、圧制者なのである。オンカーは次のように指示した。「われわれは都市住民を抹殺しなければならない。もしそうでなければ都市民はわれわれを抑圧し続けるであろう。どのようにして学校の教師や大学の教授になれるのかね。それは貧しい農民が労苦によって得た報いを盗むことによってである。どのようにして金持ちは美しい屋敷や自動車を得るのかね。お前たちが栽培したコメやバナナから得たのだ」と。オンカーは都市住民の野蛮な行為を来る日も来る日も繰り返し教えた (Burchett; 1981=1983: 125-126)。

オンカーは帝国主義、植民地主義、封建主義、さらにかつて権力の座にあったすべての残滓である文化、芸術を徹底的に破壊し根絶することを指示した。この指示にしたがって、プノンペンのカトリック大聖堂は爆破され瓦礫の山になってしまった。波尔・ポトは権力を確立すると、すべての伝統演劇の衣装、楽器、さらに芸術に関する記録の破棄を命じた。芸術家たちの活動の舞台となってきた各種の劇場、芸術大学、音楽大学なども、ほとんど破壊された。カンボジアの文化を保存し発展させてきた図書館、

研究所、博物館、記念碑なども根こそぎ一掃されたのである。芸術家たちも農業に従事することとなった。

都市から下放してきた住民は「新住民」とよばれ、かれらの子供はエリートになれなかつたばかりか、軍隊にも入れなかった。かれらの都市生活の経験がクメール・ルージュの若者たちの「純粋なところ」を腐敗させる原因となると考えられていたからである。

クメール・ルージュは農業を基礎とする「清潔」で「健全」な社会に邁進するのである。カンボジアからわずかに発表される情報は新しい社会の実験がはじまったことを知らせるものだった。かつて東南アジアでもっとも魅力ある都市といわれたプノンペンの荒廃した姿は、この国で都市が完全に破壊されたことを表していた。

カンボジアとベトナムの共産主義政権はともに解放戦争に勝利したにもかかわらず、1977年12月には両国の関係は外交関係を断行するまでに悪化していた。1979年1月、ベトナムの支援を受けたヘン・サムリンに率いられた大軍が突如ベトナムとの国境を越えてカンボジア領内に侵入した。ヘン・サムリン軍は瞬間にプノンペンを占領したばかりかカンボジアの全土を制圧した。波尔・ポト軍はあっけなく破れ、タイ国境の山岳地帯に逃れた。ヘン・サムリン軍がカンボジアで見たものは、放棄され破壊された都市の姿だった。鉄道、道路、電気、水道、郵便、電話、教育などの施設が破損されたまま放置されていた。とくに世界を驚愕させたのは、クメール・ルージュによるすさまじい虐殺の跡だった。おびただしい白骨の山がカンボジアの全土で次々と発見されたのである。人口が約800万人ほどのカンボジアで、わずか4年間に100万人から200万人が撲殺されたり、飢餓と疫病のなかで死亡したのである。カンボジアで史上まれに見る惨劇が起こっていたのである。

【都市なき支配と文化の破壊】

権力者が目的を達成するには多種多様な条件を検討しなければならない。このために権力はさまざまな〈情報〉や〈知識〉を必要とする。新しい秩序は魅力的な「文化」を意味するものでなければならないのである。逆説的にいえば、だからこそ、権力が作り出す新しいルールは「正当性」を確保できたのである。しかしそのためには、権力は活動のために組織と施設を必要とする。権力は拠点となる場所を生み出したのである。つまり権力が組織を収容する施設を建設することは不可欠だった。とくに国家のような巨大な権力は都市的定住を惹起する施設を必要とした。

ところが、クメール・ルージュは都市を否定した。かれらにとって、都市は諸悪の根源として否定されるべきものであった。それでいて、かれらは独自の社会主義にもとづく社会の建設を強力に押し進めようとしたのである。だが、都市を除去したなかでの権力の行使は、権力の正当性を文化にも支配の技術的合理性にも求められず、露骨な物理的「暴力」に委ねざるを得なかった。しかしこうした権力行使が人びとから疑問とされないはずはなかった。したがって、そこでは、そうした可能性をもたらしうかなる情報や知識も、汚染されたものとして破棄される必要があったのである。外国語の使用を禁止したり外国の文化を一掃したのみならず、伝統文化を抹殺しようとしたのはこのためである。知識人は徹底的に嫌われたのである。メガネをかけていただけでインテリとして疑いをかけられたり、外国語を口にただけでスパイとして扱われる世界が作り出されていた。そこでは、何も知らない子どもが「最高の知識人」として尊ばれるありさまだった（井上；2001：163）。

波尔・ポト政権にかもし出される虐殺の臭いは、ひとつにはこの都市否定の思想に求められる。権力を行使するのに十分な情報や知識のない場合には、権力を分散するしかない。しかしかれらは権力を

〈分散〉することなく、農村からあたかも権力が都市を媒介として緻密な計算のもとに作り出したルールだけが可能とするような強力な支配を行ったのである。文化によって正統化されない目的の達成には、物理的暴力の行使が不可避となった。クメール・ルージュの権力は文化に覆われることなく、むき出しのまま行使されたのである。人びとは目的の達成に障害となると考えると、反革命を理由にクワや竹の棒で撲殺していった⁽⁶⁾。

都市は国家権力のような巨大な権力にとって、その力を行使するうえで欠くことのできない装置である。拠点となる都市を経由することなく、地方から地方を統治することは容易なことではない。この点では、H. ルフェーブルの指摘するように、都市はひとつの「媒介」なのである (Lefebvre; 1968=1969: 77)。そもそも情報や知識にこと欠く農村から農村を統治することなど不可能なのである。このため地方を統治する拠点となる都市のない時代には、封建制度などさまざまな分権的な統治システムが生み出されてきたのである。集権と分権の問題は権力の永遠のテーマでさえある。

第5章 都市——善悪の彼方——

【繰り返される都鄙問答】

都市への賛美と否定はいつも、どこでも繰り返し問い続けられた。都市の優位を解く人でも、空間が狭いことを好んでいっているわけではない。都市の利便を強調する人でも、田舎の特徴である広い部屋や樹木を求めている。庭の広さが都会の家の豊かさの象徴となっている。その一方で、田舎の自然のよさを強調する人でも、ロウソクの生活やポットン・トイレまで好むわけではない。都会にいて田舎の美しい自然のなかにある牧場にあこがれ、田舎に着いてみると牛の糞にハエが集まっているのに閉口し、夢と現実が違ったなどという話はどこにでもある。田舎では「東京は生き馬の目を引き抜く」恐ろしいところだと聞かされてきたのに、東京の人びとの開放的な親切心には驚いたという話をする人も多い。

人びとの集まる都市は、物財、富、チャンスが集まっている。このためとくに若者は都会にあこがれる。また、田舎の青年が期待を担って都会に出て、やがては故郷に錦を飾る日を夢見てきびしい生活に耐える姿は理想化されてきた。多くの青年が「身を立て名をあげやよ励ん」なのである。

多くの人や物資のあつまる都市では、人びとはさまざまな人や物や文化と接する機会をもっている。しかも都市に住む人間は直接的であれ、間接的であれ、基本的には動員された人や物資の恩恵を享受する人たちである。したがって、都市での生活は人びとのあこがれの的となった。英語においても都会的 (urbanities) という言葉の意味は、洗練された上品で優雅な生活態度であり、礼儀正しくあかぬけした身ぶりをもつことであった。

しかし根源的思考には上面な都市生活ではなく、田舎での生活が必要だとの見解も少なくない。M. ハイデガーは、哲学が奇人の不自然な営為として行われるのではないとして、それは農夫たちの仕事とまったく同じものであるという。田舎の孤独は根源的な力をもっており、この力はわれわれをばらばらにしてしまうものではなく、事物の本質を間近で解き放つ力となっているというのである (Heidegger; 1934=1976: 108-10)。リースマン (David Riesman) はアメリカ人にとってサバービアの観念というのはきわめて単純であって、それはバイブルに描かれた世界、農村的生活への一般的な夢なのだという。つまりアメリカ人のサバービアへの移住を動機づけるのは、俗物主義でもないし、また金持ち階級を模倣したいという気持ちでもない。それは何よりも都市と工業主義に対する反逆なのである (Riesman; 1994=1968: 131)。

現在、上海は未曾有の繁栄を遂げている。上海は中国発展の牽引車となっている。最近の上海は植民地時代に「魔都」とよばれていた時代を髣髴とさせる頹廢的魅力も漂っている。地方の人の上海人に対する評価はさまざまである。地方の人たちは「時代を先取りする」「センスが良い」「知的で理論家である」「アイデアが豊富である」などと賞賛する。その一方で、「優越感が強い」「傲慢である」「地方出身者を見下す」「計算高い」「あらさがしばかりする」と嫌がられている。

豊かな都市生活を求める一方で、素朴で静かな生活にあこがれる人も後をたたない。宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ、風ニモ負ケズ」の詩は人びとを魅了してやまない。都会で働いた後、老後は田舎でゆっくりと過ごしたいというのは、ひとつの決まり文句となっている。

もっとも最近では老後に、郊外から都心へ移動するという従来とは逆のパターンが増えてきた。若いときに子育てのために都心から郊外に引っ越してきた夫婦が、子供も独立し、老後は便利な都心で過ごしたいと都心に回帰する例がめだつようになった。多くの家族が郊外の静寂よりも、都心のにぎわいのなかでのマンション生活をするようになっていく。駅前の混雑を嫌う人も、駅前が「シャッター商店街」になるのにはさびしさを覚えるようである。人びとは都鄙の優劣をさまざまな視点で絶えず問いただしている。

【人類と都市の未来】

都市のランドマークとなるのが、巨大な施設である。巨大な建造物は何よりも、権力を感じさせる。政治権力や宗教的権力は都市のシンボルとなるような建造物を建設した。教会、モスク、寺院など宗教施設や王宮、議事堂などは規模と高さを誇った。今やランドマークタワーとなるのは、高層の事務所や住宅である。ニューヨークのマンハッタン島の摩天楼はアメリカの繁栄を象徴した。とくにエンパイアー・ステート・ビルは長い間そのシンボルとなっていった。

都市は発展すればするほど、無機質な人工の構築物で覆われていった。このことが、人間の本来の生活から逸脱したものだとする考え方も根強かった。このため都市に自然をとりもどそうとするさまざまな試みがなされた。都市内には公園や緑地が不可欠となっていた。また、サバービアや田園都市の建設は都市に自然を取り戻そうとするだけでなく、そこに新しい社会を生み出そうとするものだった。

こうしたなかで、ついにサバービアが都市の主役となる都市が出現する。ロサンジェルスでは自然の中での一戸建て住宅が都市構造の最重要の要素と位置づけられ、そこから他の施設の配置が考えられたのである¹⁷⁾。この意味では、ロサンジェルスは都市のまったく新しいモデルを提供した。ロサンジェルスは高い建物のない広大な低密度の都市として拡大していったのである。分散的な都市の拡大は自家用車を普及させ、大衆交通機関としての路面電車は存続できなくなった。ロサンジェルスは自家用車時代の都市であった。

ところが、ロサンジェルスのこうした発展形態も、やがて転換を余儀なくされる。ロサンジェルスが金融や文化の中心として発展するためには、高密度化は避けられなかったのである。1970年代後半から1980年代に次々と超高層ビルが建設され、かつてのロサンジェルスは様相を一変させた。ダウンタウンには、超高層ビルが集中するようになり、かつての賑わいももどってきた。ロサンジェルスは1970年代後半以降、再集中化がはじまることになる。多くの一戸建て住宅が高層のアパートに取って代わられた。高層ビルの建設とともにジェントリフィケーション (gentlification) も進行した。ロサンジェルスにも高密度の中心地が形成され、その意味では普通の都市への道をたどるようになる。

天空に聳え立つ高層建築は富と力を象徴する。ニューヨークやシカゴにはじまった高層建築はやがて世界中に広がっていった。エンパイヤー・ステート・ビルや世界貿易センター、シカゴのシアーズタワー、クアラルンプールのペトロナスタワー、上海の金茂ビル、台北に建設中の金融センタービルなど超高層建築が高さを競った。しかしこうした高層建築は経済的な繁栄のなかで計画されるものである。したがって、建設後に不況を迎えることが少なくない。エンパイヤー・ステート・ビルは経済恐慌のなかで、エンブテイ・ステート・ビルと皮肉られた。マレーシアはクアラルンプールのペトロナスタワーの完成後、数年で経済危機に見舞われた。なかでも金茂ビルをはじめ上海の新開地浦東には200棟もの高層ビルが建設された。しかし高層ビルの建設に投資した華僑などの外来資本は家賃の暴落で大損をしている。ピョンヤンの100階を越える柳京ホテルは建設が中断された奇怪な三角形の巨大な姿をさらしたまま放置されている。

日本でも1985年に国土庁は東京における将来の膨大なオフィスビルの不足を予測した。このためビルの建設計画が相次ぎ、そのための用地買収が「地上げ」として全国的な話題となった。東京の各地で開発計画が発表された。大手のゼネコン各社は1990年前後に、1000メートル以上の超超高層ビル構想を発表するありさまだった。しかしバブルは破裂した。これらの土地はビルが立たないまま放置された。その後、塩漬けにされた土地は時を経るとともに不良債権と化したばかりか、日本経済の根底を揺るがすにいたっている。

1000メートル以上のビルの建設は、技術的には可能なのかもしれない。しかしそれはエネルギーの浪費のみならず、未知の深刻なリスクが予想される。『聖書』に記された人間の不遜さを表す「バベルの塔」の物語は、まさにこのことへの警鐘なのである。巨大な建造物は環境問題をはじめ多くの問題を問いかけている。

とはいえ、都市のない生活など考えられない。都市の存在は人類に不可欠な存在となっている。人間の生活は都市あればこそである。それは古くから意識されてきた。トマス・モア (Thomas More) は理想社会としてユートピアを描いた。しかしそのユートピア島にも、首都のアマロトゥム (Amarotum) をはじめ53の都市が存在している。都市のない社会は存在しえないのである。都市なき社会を求めたボル・ポト政権下のカンボジアも悲劇的結末を迎えることになった。都市と農村との不均等発展の解消を掲げた中国共産党も経済的低迷のなかで大きく舵取りを変えた。鄧小平は改革開放策のもと先に豊かになれるものが豊かになり、後の者がそれに続くという「先豊起来」論を提唱する。先豊論は社会主義市場経済の名のもと中国に急激な経済発展をもたらした。

都市の人間も自然をもとめている。都市では公園や緑地を設けたり、狭い庭を耕したり、窓を花で飾ったり、屋内に観葉植物を構えている。さらに田舎の観光地にでかけたり、保養地にいたり、別荘を構えたりしているのである。都市生活は人工的な環境のなかで表面的、断片的、打算的な社会関係からなる味気ない生活といわれてきた。しかしそれも考え方次第である。

長崎県西彼杵郡の端島は長いあいだ日本でもっとも人口密度の高いところといわれた。端島は海底炭鉱の施設と高層の炭住とが狭い場所に林立し海上に浮かぶ姿から「軍艦島」とよばれてきた。端島は全島をくまなくコンクリートで固められ、すべてが人工の構築物で覆われた自然のまったくない世界であった。このため端島はもっとも非人間的な場所だとまでいわれてきた。しかし1974年の炭鉱閉鎖後、まもなく端島は無人口島となった。その端島も今では写真集が出版され、往時の生活を懐かしむ島民も多い。島民にかぎらず端島は多くの人たちの時代の思い出となっている。

都市が農村を含めて周囲の環境を変えてきたことはいまでもない。都市の存在が大きくなるにつれて環境破壊といわれるような状態を生み出している。その一方で、環境保護の重要性を強張するのもまた都市なのである。自然をまもろうとするのは都市の発想である。イギリスの「ナショナル・トラスト」運動は産業化のなかで失われる自然への愛着から生み出されたのである。

現在、一般に人が田舎に抱いているイメージはレーモンド・ウィリアムズのいうように、過去のイメージであり、都会は未来のイメージをもっている (Williams; 1973=1975: 392)。今日のグローバリゼーションが進むなかで「都会」と「田舎」の問題は、先進国と低開発国のテーマとも重なっている。先進国首脳会議 (サミット) に WTO 反対を掲げて押しかける NPO にも、都市と農村の対立の構図が透けて見えている。

都市化が人類にとって避けられないものであるにしても、人びとが快適な生活を望むかぎり、都鄙の問いかけは歴史を越え、文化を越えてなされるだろう。しかしその回答は、時代により、地域により、そして何よりも「問いかけ方」により多様なものとなるだろう。

注

- (1) 柳田國男はこのことについて、人の気付かぬうちに、いつの間にか殿様よりも士族よりも、周囲の村々に住む農民が、御城下の町の真の支持者になっていたからだという。柳田は、そこに都市の「二次成長」を見ているのである。この意味で、都市と農村は連続しているのである (柳田國男; 1969: 25)。
- (2) このことについて、マルクスとエンゲルスは『共産主義宣言』のなかで、次のようにのべている。都市-農村関係をブルジョワ階級は農村 (カントリー) を都市の支配に屈服させた。かれらは巨大な都市を作り出し、都市人の数をきわめて増大させた。ブルジョワ階級は人口の著しい部分を農村生活の蒙昧から救い出した。かれらは、農村を都市に依存させたように、半未開地を文明諸国に、農耕諸民族をブルジョワ諸民族に、東洋を西洋に従属させたと主張する (Marx-Engels; 1939=1951: 45)。
- (3) 共産主義思想は資本主義が生み出す都市病理への鋭い批判から、反都市主義の性格を色濃くもっている。ところが、マルクスやエンゲルスの著作において、明確に都市を否定しているのはエンゲルスの『反デューイング論』における次の一節だけである。「なるほど文明は、われわれに大都市という遺産を残した。しかしこれを除くためには多くの時間と労苦を要するであろう。だが、それがどんなに長々しい過程であるにせよ、大都市は取り除かなければならないし、取り除かれるであろう」と (Marx-Engels; 1968; 1968: 305)。
- (4) 毛沢東は 1949 年 3 月に、「これからは農村から都市への時期、しかも都市が農村を指導する時期がはじまるのである。党の活動の重心は農村から都市へ移される」と宣言したのである (毛沢東; 1962)。
- (5) ボル・ポトの政権の中核を担ったキュー・サンバン (Khieu Samphan) やフー・ユオン (Hou Youn) などはフランス留学中に書いた論文で、カンボジアの経済や社会について、後のかれらの政策を髣髴とさせるような議論を展開している。フー・ユオンは 1955 年にソルボンヌ大学に提出した論文で、カンボジアの都市-農村関係について、ボル・ポトの政権での都市政策を暗示するような見解を発表している。フー・ユオンは 1955 年にソルボンヌ大学に提出した論文で、「われわれが『都市』とか、市場のある『おおきな町』と呼んでいるものは、農村の活力を吸い取ってしまうポンプなのである。都市や市場のある町が農村に供給しているあらゆる品物はまさに農村にばらまかれているエサである。広大な農村は、都市や市場を養っている。都市や市場のある町は目新しい、最新の装いをこらしているが、農村に寄生しており、農村の両肩にくだり込んだ重荷なのである。……商業経済の圧迫によって農村は疲弊し、やせ細り、ますます悲惨な状態になっている。農村では樹々は大きく育っているが、せつかく実った果実はすべて都市へ運び去られてしまうのである」と。また、キュー・サンバンも「国際経済体制に組み込まれるということは、都市と農村の不均衡をますます激化させ、破局を招くことになり、わが国の人口の大部分を占める農民たちにとってまったく耐え難いこととなるだろう。すでに農民たちは国際商品、資本市場の経済に組み込まれてしまっていることによる矛盾に気がついている。したがって、客観的にみて必要なことは、自らの意思に基づいた自立的発展を目指すことなのである」との論文を発表していた (Burchett; 1981=1991: 50-51)。
- (6) クメール・ルージュの都市への評価がいかにきびしいものだったかは、キュー・サンバンが 1976-78 年にか

て、金日成について語ったことから知ることができる。キュー・サンパンはシアヌークに、「北朝鮮の金日成政権は、もしかれらが本当に共産主義の国を作ろうとしているなら『間違った方向』に進んでいる」と語ったという。「金日成は国民の生活水準や経済発展をやりすぎた。だからごらんなさい。北朝鮮の連中はきれいな家をもって、町も美しい。国民は新しい生活に執着してしまっており、新しく出発しようとか、南朝鮮を解放して祖国を統一しようとする新しい戦いにいどむという考えがなくなってしまった (Burchett, Wilfred; 1981=1991: 50-51)。

- (7) R. フィッシュマンはサバーバニゼーションの行き着いた先を、ロスアンジェルスに見ている。ロスアンジェルスでは、土地利用が宅地供給に従属させられたのである。核家族の一戸建ての住宅地が都市の主役の役割をはたす存在となるのである。都市の機関は住宅に従属させられる。サバービアが都市をみずからのイメージで再定義したのである。ロスアンジェルスは郊外のメトロポリスとなっていた (Fishman; 1987=1990: 176)。

引用文献

- Baali, Fuad, 1988, *Society, State, and Urbanism*, State, University of New York Press.
- Becker, Jasper, 1996, *Hungry Ghost: China's Secret Famine*, Jhon Muray Ltd, London. (川勝貴美訳, 1999, 『餓鬼』中央公論新社)
- Beck, Ulrich, Anthony Giddens & Scott Lash, 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in Modern Order*, Polity Press, , 1997, 『再帰的近代化』而立書房)
- Berry, Brian J. L., 1973, *The Human Consequence of Urbanization*, The Macmillan. (伊藤達雄訳, 1976, 『都市化の人間の結果』鹿島出版会)
- Beier, A. L. & R. Finlay (eds), 1986, *London 1500-1700: The Making of the Metropolis*, Longman Group Limited. (川北稔訳, 1992, 『メトロポリス・ロンドンの成立』三嶺書房)
- Bowley, A. L., & Burnet-Hurst A. R., 1915, *Livelihood and Poverty*, London G. Bell and Sons. (友枝敏雄・速水聖子・土井文博訳, 2001, 『計量社会学の誕生』文化書房博文社)
- Bowley, A. L., & Hogg, M. H., 1925, *Has Poverty Diminished?* P. G. King and Sons. (友枝敏雄・速水聖子・土井文博訳, 2001, 『計量社会学の誕生』文化書房博文社)
- Braudel, Fernand, 1979, *Civilisation matérielle, économie et capitalisme, ……*, Siècle, tome 1.. 2.. 3.. (村上光彦他訳, 1985, 『文明・経済・資本主義』みすず書房)
- Braudel, Fernand, 1966, *La méditerranée et monde méditerranéen à l'époque de Philippe II.*, Armand Colin, Deuxième édition revue et corrigée, 1966. (浜名優美訳, 1991, 『地中海』1.. 2.. 3.. 4. 藤原書店)
- Braunfels, Wolfgang, 1976, *Abenlandesche Stadtbaukunst Herrschaftsform und Baugestalt*. DuMont Buchverlag GmbH, Köln. (日高健一郎訳, 1986, 『西洋の都市・その歴史と類型』丸善)
- Burchett, Wilfred, 1981, *The China-Cambodia-Vietnam Triangle*. (土生・小倉・文訳, 1991, 『カンボジア現代史』連合出版)
- Cannadine, D. & David Reeder (eds.), 1982, *Exploring the Urban Past: Essays in Urban History by H. J. Dyos*, Cambridge University Press.
- Chandler, Tertis & Gerald Fox, 1974, *3000 Years of Urban Growth*, Academic Press, N.Y.
- Fishman, Robert, 1987, *Bourgeois Utopias: The Rise and Fall of Suburbia*, Basic Books, New York. (小池和子訳, 1990, 『ブルジョワ・ユートピア』勁草書房)
- Fuchs, R. F. & Oth., 1994, *Mega-City Growth and the Future*, United Nations, University Press, Tokyo.
- 藤田弘夫, 1991, 『都市と権力—飢餓と飽食の歴史社会学—』創文社
- 藤田弘夫, 1992, 「中国社会主義と『都市=農村』関係の展開」『日吉社会科学紀要』第4号
- 藤田弘夫編, 1993, 『飢餓・都市・文化』柏書房
- 藤田弘夫, 1993, 『都市の論理』中公新書
- Gandhi, M. K., Compiled & edited by V. B. Kehr, 1957, *Economic and Industrial Life and Relations*, Vol. 2., Navajivan Publishing House, Ahmedabad.
- Geddes, Patrick, 1915 (1968), *Cities in Evolution*, Ernest Benn Limited. (西村一朗他訳, 1982, 『進化する都市』鹿島出版会)
- Giddens, Anthony, 1985, *Nation-State and the Violence*, Polity Press, Cambridge. (松尾精文・木幡正敏訳, 1999, 『国民国家と暴力』而立書房)

- Gilbert, Alan, 1996, *The Mega-City in Latin America*, United Nations, University Press, Tokyo.
- Gottmann, Jean, 1967, *Megalopolis: The Urbanized Northeastern Seaboard of the United States*, The Twenties Century Fund Inc. (木内信蔵・石水輝雄抄訳, 1968, 『メガロポリス』鹿島出版会)
- Harvey, David, 1973, *Social Justice and the City*, Edward Arnold Ltd. (竹内啓一・松本正美訳, 1980, 『都市と社会的な不平等』日本ブリタニカ)
- Heidegger, Martin, 1934, Warum Blleiben wir in der Provinz?. Guido Schneberger Ed. *Nachlese zu Heidegger*, Bern, 1934. (八代梓訳, 1976, 『30年代の危機と哲学』イザラ書房)
- Heinz, G. & E. Lichtenberger (eds), 1986, *The Take-off Suburbia and the Crisis Central City*, Frranz Steiner Verlag, Wiesbaden, GMBH
- Hibbert, Christopher, 1986, *Cities and Civilizations*, George Weidenfeld & Nicolson Ltd. London. (芦原初子・渡辺真弓訳, 1992, 『歴史の都の物語』上・下 原書房)
- 広瀬和雄編, 1998, 『都市と神殿の誕生』新人物往来社
- Hohenbeg, P. & Lynn Hollen Lees, 1985, *The Making of Urban Europe 1000-1950*, Harvard, University Press.
- Howard, Ebenezer, 1898 (1922), *Garden Cities of To-morrow*. (長素連訳, 1973, 『明日の田園都市』鹿島出版会)
- Ibn Khaldūn, al-Muqaddima, 1979-1980 (森本公誠訳『歴史序説』第1巻 第2巻 岩波書店)
- Jacobs, Jane, 1984, *Cities and the Wealth of Nations: Principles of Economic Life*, Rondon House. (中村達也・谷口文子, 1986, 『都市の経済学』TBS ブリタニカ)
- 菊池英夫, 1992, 「中国都市・聚落史研究動向と『城郷(都鄙)関係』問題についての私的展望」唐代史研究会編『中国の都市と農村』汲古書院
- 北村優季, 1996, 「古代都市史」『年報都市史研究』第4巻 山川出版社
- 小島麗逸, 1978, 『中国の都市化と農村建設』龍溪書店
- 熊田俊郎, 2000, 「中国の都市建設」『日本都市学会年報』第33巻
- Laslett, Peter, 1965, *The World We Have Lost*, Curtis Brown Ltd., London. (川北稔他訳, 1986, 『われら失いし世界』三嶺書房)
- Lefebvre, H., 1968, *Le Droit a la ville*, Anthrops. (森本和夫訳, 1969, 『都市への権利』筑摩書房)
- Lefebvre, H., 1970, *La Révolution urbaine*, Gallimard. (今井成美訳, 1974, 『都市革命』晶文社)
- Luccarelli, Mark, 1995, *Lewis Mumford and the Ecological Region: The Politics of Planning*, The Guilford Press, N.Y.
- Masotti, Louis, & J. K. Hadden (eds.), 1973, *The Urbanization of the Suburbs*, Sage Publication, Beverly Hill.
- Marx, Karl-Friedrich Engels, 1957, *Werke*, Bd. 20, Dietz Verlag, Berlin. (全集刊行委員会訳, 1968, 「反デューリング論」『全集』20巻 大月書店)
- Marx, Karl-Friedrich Engels, 1939, *Manifest der Kommunistischen Partei*. (大内兵衛・向坂逸郎訳, 1951, 『共産党宣言』岩波文庫)
- Marx, Karl-Friedrich Engels, *Die deutsche Ideologie*. (広松渉編訳, 1974, 『ドイツ・イデオロギー』河出書房 全2冊)
- Marx, Karl-Friedrich Engels, 1957, *Werke*, Bd. 2, Dietz Verlag, Berlin. (全集刊行委員会訳, 1971, 『イギリスにおける労働者階級の状態』1・2 大月書店)
- Marx, Karl-Friedrich Engels, 1957, *Das Kapital*, Dietz Verlag, Berlin. (全集刊行委員会訳, 1968, 『資本論』大月書店)
- Mercier, L., 1782, *Le Tableau de Paris*. (原宏編訳, 1989, 『18世紀パリ生活史』上・下 岩波文庫)
- Meadows, P. & E. H. Mizruchi (eds.), *Urbanism Urbanization and Change*, Addison Wesley.
- Mingione, Enzo, 1977, *Social Conflict and the City*, Basil Blackwell. (藤田弘夫訳, 1985, 『都市と社会紛争』新泉社)
- 毛沢東, 1962, 「中国共産党第七期中央委員会第二回総会での報告」『毛沢東選集』第4巻 下 新日本出版社
- Mumford, Lewis, 1922 (1962), *The Story of Utopia*, The Viking Press. (月森左知訳, 1997, 『ユートピアの思想的考察』新評論)
- Mumford, Lewis, 1938, *The Culture of Cities*, Harcourt Brace Janovich., N.Y. (生田勉訳, 1974, 『都市の文化』鹿島出版会)
- Mumford, Lewis, 1961, *The City in History*, Harcourt Brace & World, Inc., N.Y. (生田勉訳, 1969, 『歴史の都市・

明日の都市』新潮社)

長井義雄, 1993, 『ロバート・オウエンと近代社会主義』ミネルヴァ書房

内務省地方局有志, 1980, 『田園都市と日本人』講談社

中井信彦, 1973, 『歴史学的方法の基準』塙書房

成田龍一編, 1993, 『都市と民衆』吉川弘文館

西山八重子, 2002, 『田園都市の社会学』ミネルヴァ書房

仁藤敦史, 1999, 「古代都城の首都性」都市研究会『都市史研究』7号

荻生徂徠, 1987, 『政談』岩波文庫

Olsen, Donald, 1986, *The City as a Work of Art: London, Paris, Vienna*, Yale University Press. (和田旦訳, 1992, 『芸術作品としての都市』芸文出版)

大室幹夫, 1981, 『劇場都市』三省堂

奥井復太郎, 1940 (1985 復刻版・1998 著作集), 『現代大都市論』有斐閣

Osborn Milton, 1994, *Sihanouk: Prince of Light, Prince of Darkness*, Allen & Unwin Pty Ltd, St Leonards. (石澤良明・小倉貞雄訳, 1996, 『シハヌーク』岩波書店)

Owens, E., 1991, *The City in the Greek and Roman World*, Routledge. (松原國師訳, 1992, 『古代ギリシア・ローマの都市』国文社)

Pirenne, Henri, 1927, *Les villes du moyen âge*. (佐々木克巳訳, 1970, 『中世都市』創文社)

Pryer Jane, 1988, *Cities of Hunger: urban malnutrition in developing countries*, Oxfam.

歴史読本編集部『王城と都市』新人物往来社 1999年

Riesman, David, 1964, *Abundance for What and Other Essays*, Doubleday & Company Inc., N.Y. (加藤秀俊訳, 1971, 『何のための豊かさ』みすず書房)

Rousseau, Jean-Jacques, *Œuvres complètes*. (小林善彦訳, 1982, 「告白」『全集』第1巻 白水社, 1977, 松本勤訳「新エロイズ」『全集』第9巻 白水社, 樋口勤一訳, 1987, 「エミール」『全集』第7巻 白水社)

Smith, M. P. & J. R. Feagin (eds.), 1992, *The Capitalist City*, Basil Blackwell Oxford.

Smith, N. & P. Williams (eds.), 1986, *Gentrification of the City*, Allen & Unwin Inc.

Simmel, Georg, 1903, *Die Großstadt und Geistesleben, Jahrbuch der Goethezeit, IX*. (居安正訳, 1978, 「大都市と精神生活」ジンメル著作集 第12巻 白水社)

園田英弘, 1994, 『『みやこ』という宇宙』日本放送出版協会

Sorokin, P., 1942, *Man and society in Calamity*, Dutton, (大矢根淳訳, 1998, 『災害における人と社会』文化書房博文社)

田島淳子編, 2000, 『上海-甦る世界都市』時事通信社

店田廣文, 1999, 『エジプトの都市社会』早稲田大学出版部

丁抒, 1991, 森幹夫訳『人禍: 1958~1962』学陽書房

Tilly, Charles and Wim P. Brockmans, *Cities and the Rise of States in Europe: AD. 1000 to 1800*, Westview Press, Oxford, 1989.

Weber, Adna Ferrin, 1899, *The Growth of the Cities in Nineteenth Century*, New York, Macmillan.

Weber, Max, 1922, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 2., 2 Aufl. J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen. (木全徳雄訳, 1971, 『儒教と道教』創文社)

Weber, Max, 1972, *Wirtschaft und Gesellschaft*, 5 Aufl. J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen. (世良晃志郎訳, 1974, 『都市の類型学』創文社)

Weber, Max, 1924, *Wirtschaftsgeschichte: Abriss der universalen Sozial-Wirtschaftsgeschichte aus den nachgelassenen Volesungen*, herausgegeben von S. Hellman und Palyi, München. (黒正敏・青山秀夫訳, 1955, 『一般社会経済史要論』上・下 岩波書店)

Williams, Raymond, 1973, *The Country and the City*, Chatto and Windus, London. (山本和平・増田秀男・小川雅魚訳, 1985, 『田舎と都会』晶文社)

柳田國男, 1969, 「田舎対都会の問題」定本『柳田國男集』第16巻 筑摩書房

柳田國男, 1969, 「都市と農村」定本『柳田國男集』第16巻 筑摩書房